

1-2 (2)

自家造血幹細胞移植を伴う大量療法の成績 (double autotransplant)
(会長要望講演)

福田俊一、遠西大輔、角南一貴、瀬崎達雄

独立行政法人国立病院機構 岡山医療センター 血液内科

【目的】近年、高齢者に多く発症する多発性骨髓腫に対しても大量化学療法を併用した自家造血幹細胞移植が広く行われるようになり、寛解率を高め生存期間を延長させる治療として期待されている。今回、自家造血幹細胞移植を計画的に2回施行した double autotransplant の成績を発表する。【方法】対象は1994年8月から2004年6月の間に当院にて施行された多発性骨髓腫患者28名。男女比15:13、年齢42~69歳(中央値55.5歳)、IgG型22名、IgA型4名、ベンスジョーンズ型2名。寛解導入療法はVAD療法を中心とし、移植前処置はL-PAM単独を原則とし一部症例はL-PAM+TBI+Etoposideで行われた。【結果】化学療法開始後の観察期間中央値は中央値21.1ヶ月、5年生存率60%と良好だが、CRからの再発4名、PRからの増悪8名、死亡7名とまだ十分な成績とはいえない。【結論】double autotransplantは寛解率を向上させ、生存期間の延長をもたらすが、移植後2年以上経過して再発する症例も認め、いまだ治癒には至っていない。今後、13番染色体の欠如等の予後不良因子があり、HLA一致ドナーが存在すれば、初回治療から auto transplant と移植前処置を軽減した同種造血幹細胞移植 (RIST)を組み込んだ double transplant も検討されるべきである。